アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品： 君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

Ⅰ．恋愛は転移からはじまる

Ⅱ．恋愛は人との距離を縮めること

Ⅲ．恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

Ⅰ．恋愛は転移からはじまる

転移とは？　出会いは転移から

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライエントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

転移は人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じている。

とりわけ情緒的に不安定な時期に受容されることで、過去の重要な対象との関係性が転

移として再現されやすくなる。

「君に届け」では、この転移関係の形成が主人公たちの出会いの時点から見られる。風早くんは入学式で道に迷っていた時に優しく道案内をしてくれた爽子に対して陽性転移を抱き始める。一方の爽子は、クラスの雑用を自ら推薦してやろうとした際、風早くんが彼女の日常的な貢献を理解し見守っていてくれたことを知り、彼への陽性転移を形成していく。このように、互いへの理解と受容を通じて、両者の間に転移関係が深まっていったと考えられる。

陽性転移が起きる中で、爽子は、風早くんに近づきたい一方で、風早君を理想化する中で他者との関わりを持とうとし始める。理想化し、自分も風早くんのようになりたいという思いもあったように感じられる。

このように風早くんが爽子にとっての良い対象となり、これまで内向的で壁を作ってきた爽子が周囲の世界に関わろうとするきっかけを作り出している。しかしこれは飽くまで実際の風早くんではなく爽子の心のなかで抱く風早くん像であり、彼女の内的対象である。それは実際の風早くんではないのである。

Ⅱ．恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。しかしその関係が成立するかどうかは相手の思惑も関係する。相手が自分をどのように感じているのか、手探りで確かめていく作業が必要であり、なかなか確証が得られるものではない。それ故に、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。

「君に届け」の主人公の黒沼爽子は風早くんと恋仲になる前に、彼女は容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、彼女自身も心の壁を作っていた様に感じられる。その彼女が風早くんとの出会いで心がどのように揺れ動いていくのかみていく。

爽子は肝試しで風早くんと二人きりになった際、これまで経験したことのない新たな感

情に戸惑う。「まるで生まれかわったみたいに 初めての気持ちばかり」と表現されるように、風早くんとの関わりが爽子に多くの「はじめて」をもたらしている。
その後、クラスメイトから二人の関係を冷やかされる場面では、風早くんが爽子を守る行動を取る。爽子は感謝しつつも、様々な感情の混乱から自ら距離を置くことで事態を収めようとする。これは自己防衛的な反応であり、一度近づいた風早くんとの関係を壊してしまう結果となる。

しかし、爽子はこの出来事を通じて、自分がこれまでとってきた「傷つかないように距離を置く」という対処方法に限界を感じ始める。内面では変化の兆しが芽生え、新たな関係構築への意識が生まれている。

登校時の再会場面では、クラスメイトと風早くんからの謝罪の品に感極まって涙を流す爽子だが、彼女はまだ風早くんの真意を理解せず、自己防衛的な態度を継続している。この背景には、爽子が自分を風早くんと対等な存在として認識できず、彼を手の届かない憧れの対象として位置づけている心理がある。

「君に届け」というタイトルが示唆するように、物語は爽子が自己防衛の殻を破り、特に風早くんとの心理的距離を縮めていく過程を描いている。しかし爽子が風早くんと対等に付き合うには、自身が心の中で抱いてきた理想化した風早くん像を壊し、実際の風早くんの存在を受け止めていく必要がある。それは風早くんだけでなく、様々な人々との距離を縮め、その中で生じる自身の感情を戸惑いながらも受け止めていくプロセスでもある。そのような爽子の心の成長が今後の展開に描かれている。

２．矢野あやねと吉田千鶴との友情

「君に届け」における思春期の葛藤と成長

爽子は風早くんという「良い対象」に支えられながら外的世界との関わりを広げていく。矢野や吉田との友情が芽生え、クラスメイトとの距離も縮まっていくが、そこには思春期特有の葛藤や困難が伴う。

思春期（Adolescence Process）は二次性徴に伴い心身に大変動が生じる時期だ。潜伏期に収まっていたエディプス葛藤が再燃し、アイデンティティが揺らぎ、社会的・家庭的秩序が問い直される。慣れ親しんだ生き方が試される局面であり、誰もが喪失感を抱く「第二の分離個体化」の時期でもある。

この年代の若者は「妄想分裂ポジション」と呼ばれる思考傾向を示し、物事を白黒はっきりと二分法的に捉える。自己中心的視点から世界を解釈し、自分の外見に過剰な意識を向け、常に他者からの評価を気にする傾向がある。

爽子もこの思春期的混乱の中で揺れ動いている。周囲を迫害的に捉える一方、親しくなった相手を「夢のよう」と理想化する両極端な認識を示す。彼女は無意識のうちに外の世界を「悪い対象」と捉え、迫害不安を抱えている。そのため悪口に敏感に反応し、自己否定感が強まると他者との距離をさらに取ろうとする。しかし風早くんという「良い対象」の存在が、彼女の変化を促していく。

この変化が顕著に表れたのが、数学のクラス替えと席替えのシーンである。自分の席を「たたられる」と言われた爽子は勇気を振り絞って「大丈夫だよ」と声を上げる。心の中で「言った、言った、言ったよ！」と自分を鼓舞するこの行動は、以前の彼女からは考えられない変化だ。

席替えでも「貞子の近くは避けたい」という雰囲気に傷つきながら「いつか『この席になれて嬉しい』って誰かと言えたらな」と願う。そして風早くんが隣の席を希望し、矢野と吉田も近くに座るという出来事が起こる。

この経験を通して爽子は風早くんへの感情が「憧れも尊敬も飛び越えて」「大好きな気持ち」へと変化していると自覚する。これは単なる恋愛感情だけでなく、主体的に他者と関わりたいという内的変化の表れでもある。やがて彼女の講義ノートが評価されることで、クラスメイトからも受け入れられるようになり、社会的世界が広がっていく。

→しかし瑣末な噂が広がっていき、爽子と周囲の人たちへの溝が生じていく。

３）噂、いき違いからの誤解

風早くんとの距離も近くなり、矢野やちづとも交友関係が形成されそうな時に、彼女らの関係性を壊す様な噂話（吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴している）が広がり、そのことに加え、些細ないき違いから、彼女らのとの関係がギクシャクしていく。その中で爽子はトイレで噂を聞く。
それは「貞子（爽子）が吉田と矢野をバックにつけて、風早くんをいいように使っている」という、ありもしない噂であり、それで「貞子につきまとわれてたら　株を落とす」という話を聞き、爽子は自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないか？自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに風早くんからも再び距離を取ろうとする。

【考察】

元々殻に閉じこもりやすい爽子は、風早くんを始め、矢野や吉田、そしてクラスの人たちからも受け入れられていき、自分の思いが叶いつつある中で、強い喜びを感じていたと思われる。しかし、その距離が続くなかで、爽子は自分が本当に彼らに受け止めてもらえている存在なのか、という疑念を抱き始めたと考えられる。確固とした関係性が築かれていないため、噂話（ある意味、自身が周囲をかき乱しているという内的空想の投影でもある）や些細ない行き違いから、対象（風早くんたち）を傷つけてしまったのではないかという罪責感に苛まれたと考えられる。爽子は彼らとの距離感が不安定に感じられ、今の関係性が怖くなり、自身が傷つくことを恐れ、反動で再び距離を取ろうとしている。

そして対象関係論の理論で考えたとき、爽子の心は迫害不安と抑うつ不安が混在しているようにも感じられる。詳細にいうと、自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの状況であった爽子が風早くんに母の様に抱えられる中で（なにかここいらが「竜とそばかすの姫」を想起させられる。)、徐々に妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変わっていく中（抑うつポジションへの過渡期）で、再び退行（退避）しようとしているとも捉えられる。

cf：**PS ポジション　迫害不安→PS ポジション　抑うつ不安→D ポジション**

しかし風早くんへの思いも強く、爽子はその自身が抱く思いをあらがいたい思いも強く出

ている。

印象的なシーン

風早くんが黒沼の様子がおかしいといい、声かけたときに爽子は咄嗟に避けてしまい、風早くんが「…なんで…さけんの？」と言った後の爽子の思いが述べられる。

なにがあっても　風早くんは　ずっとさけないで　いて　くれたのに

私が周りにいると　迷惑になる　離れた方がいい

（一方で）

さけたくない　でも　そばにいたい

さける事は正しいの？間違ってるの？　わかんないよ　わかんない

その揺れ動く葛藤のなかで苦しむ爽子に風早くんは声をかける

風早「……やっぱ　納得いかないんだけど　嫌いじゃないなら　なんで　さけんの？」

爽子「……「私と」「喋らないで」ってやっぱり言えません」泣き出す爽子

爽子「やっぱり　思ってもいない事はいえないよ〜」

風早「えっ！！　何！？」

爽子「株が落ちたらごめんなさ〜〜い　なんでもいいからそばにいたいよ〜〜」

風早「待っ…黒沼！　」強い口調で「ちゃんと喋ってくんなきゃ　わかんない」

爽子「……私が周りにいると株が落ちるって……」

風早「株！？　誰が言った！？」

爽子「う…噂で…」

風早「噂！？」

風早「株とか噂とか　そこに俺の意志はどこにもないじゃん！　それは黒沼の決める事で

はない　俺が決めることだ！」

風早「俺は……俺のしたい様にするよ　黒沼と喋りたければ喋るし　喋りたくなかったらこんな風に喋っていない！　…噂なんてどーだっていい。　俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ！！」

そこで爽子は思う

…私が周りにいたら　みんなが迷惑すると思った。

　だけど　それでも　……私は求めていたの　矢野さんや吉田さんや風早くんのような存在を--ずっと　憧れていたの

大事に思う気持ち　大事にされる気持ちを

→風早くんに抱えられる中で、距離をとり、退避しようという思いよりも、彼とそして矢野や吉田と距離を近づけ、仲良くなりたいという思いが勝る様になっている。そこで爽子は現実に向き合おうという思いが強くなり、噂に対峙していく

４）噂との対峙

　爽子がトイレにいたときに、大勢の子（A 組の女子達）が入ってきて、貞子には吉田と矢野がバックについているという噂を直接聞き、噂を話している子たちと対峙する。

そこで明らかになったことは風早くんをめぐる壮絶な争いであった。

A：あ ——そーいやさ——　貞子のウワサあったじゃん

B：あ—— 霊感じゃない方の　吉田と矢野がバックについているっていう

爽子：噂……

A：それがどーやら　最近あいつらさぁ……

爽子：ごっ……誤解だよ！！

爽子はトイレの扉を開けて毅然とした口調でいう。

その後ヒリヒリとした沈黙が流れる。爽子をその沈黙に押しつぶされるようにオドオドし

た口調になる。

爽子：だから……えっと、それは嘘情報なので！

爽子：矢野さんと吉田さんはすごく優しいひとなので！！

A：出たよ　貞子！！

B：あはは　なに言ってんのこの子！

A：やさしいだって！！

B：あたしらと喋りたいんじゃない！？

A：つーかなんかこっちにらんでない！？

爽子：これはこーいう顔で　あの…だから矢野さんと吉田さんのことは誤っ……

大勢の子のひとりが壁に爽子を押し付けて、片手で壁を叩く

B：うるっさいな　わかってるよ

A：吉田と矢野でしょ？　あの犯罪者なヤンキーといんらんね

その言葉に爽子の表情は変わり、毅然とした表情になる

爽子：（自分に言い聞かせるように）がんばれ

爽子：さっきの言葉　取り消して……

爽子は押し付けられた腕を握る

A：はあ？何この手…　話してよ

爽子：…誤解している　今、言ったの間違いだよ！

B：ちょっと聴いたぁ　今の！

爽子：矢野さんと吉田さんはそんな人じゃないよ！

（略）

A：そんなのどうだっていいんだよ　こっちはあんたの周りに吉田や矢野がいない方があんたと話ができるしね。　まああの2人だって　てきとーに面白がってあんたとつきあってたんだろーけど、もう飽きたんじゃないの？　…あんただってそうでしょ

爽子の胸を足で踏みつけながら言う。

B：2人に近づいたのも風早目当てだったんでしょ？　そんでもう邪魔になったんでしょ？

A：目障りなんだよね　みんなから離れて1人でおとなしくしててよ。　そしたらあんたから手ーひいてやっても

爽子：違う！！（重ねるように強い口調で言う）

爽子：手なんか引かなくていい。　だから…取り消して！

B：はぁ　お前何言って

爽子：全部、全部違う　みんなは…何もわかっていない！みんなは…何もしらないから

爽子：私が避けられる中で…怖がらないで…避けないで…どんなに…2人がやさしくしてくれたか…何も知らないから　私がどれだけ矢野さんと吉田さんを　すきよりもっと…… だいすきなの　だから…

そこで、その大勢の子と対峙していた爽子の言葉を聴いていた矢野と吉田が間に入り助けに入る

そして爽子は矢野と吉田にいう

私…今まで「しょうがないな」と思ってきたよ…

…「また　だめだったな」「しょうがないな」　みんなと仲良くなりたいと思う一方で　きっと諦めてたんだと思う。　…だけど私がそばにいることで2人に変な噂が流れてまた傷つけるかもしれないって思っても　それでも　…どうしても諦められなかった。

【考察】

　風早くんに支えられる中で、爽子は吉田や矢野が自分にとって大切な存在であることに気づいている。しかし爽子は周囲の噂に動揺し、自分がそういう情緒を持つことに揺れ動きが生じてきていた。

　しかし風早くんの言葉「俺は……俺のしたい様にするよ黒沼と喋りたければ喋るし喋りたくなかったらこんな風に喋ってない」によって、爽子は重要な気づきを得る。相手に情

緒を向けることは迷惑ではなく、人と関わるには大切なことなのだと。

　この気づきを得た爽子は、自分にとって吉田と矢野が大切な存在であるという思いを大事にし、トイレで女子たちの噂に勇敢に対峙する。

その強固な思いは、何か太宰治の「走れメロス」のメロスとセリネンティウスの友情を彷彿とさせる。一方で太治は「人間失格」で極度の人間不宰信や自己嫌悪、社会への適応不全を憂慮している。信頼し得る現実の人間関係に絶望していたからこそ、メロスとセリヌンティウスのような絶対的な信頼で結ばれた友情を強く求め、理想化して描いたとも考えられる。この視点は「君に届け」の爽子の心理状態にも似たものがあるように感じられる。爽子も人間関係に対して不安や恐れから防衛的な殻に閉じこもりながらも、心の奥底では深い人間関係を切望していた。それだけ爽子は元々対人希求が強く、そしてそれを風早くんを始め色々な人に受け入れてもらえたこと、それがクラス内の交友関係を広げていったと考えられる。

その後胡桃沢　梅という男子生徒からの憧れの的の人と対峙していくことになる→エディプス葛藤